

9. 国立公文書館デジタルアーカイブ 一次資料がすごい！

フェイスブック掲載日 2021/8/8

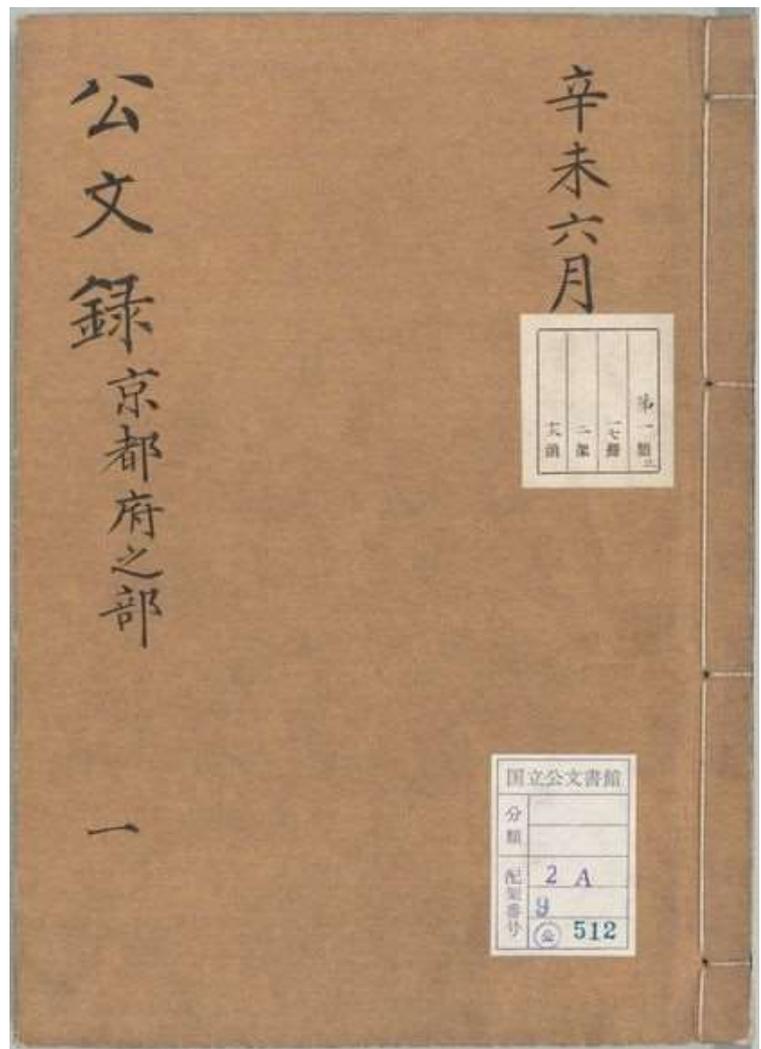
宇治における火薬の歴史は、明治の初めに近代日本の軍隊を生み出した大村益次郎に行き着く。明治新政府で陸軍を担当した大村は、国内治安と対外出兵に対応して、大阪に軍隊と造兵廠(兵器工場)、宇治に火薬庫をおくことを計画。宇治を選んだ理由は大阪まで宇治川の水運を利用できるためであり、その下見のため、京都に逗留中、刺客に襲われた。享年45歳。(『黄檗：京都大学化学研究所広報』27号より)

中公新書の「大村益次郎一幕 末維新の兵制改革」(絲屋寿雄著)「XI 遭難と終焉 兇行当夜の京都」の項を読むと、「大村は、明治2年8月13日に京都に到着、木屋町二条下ル二番路次にある長州藩の控屋敷に投宿。着京の翌日から伏見の練兵場で兵の訓練検閲をやり、諸所の兵營を巡廻し、また宇治川を遡って朝日山の下に設ける火薬庫建設地を踏査した。

国立公文書館デジタルアーカイブで、明治2年の「公文録 京都兵部省の部」をみると、「兵部大輔昨夕着京候所今日一日休息致シ明十五日ヨリ出仕可申候條二付此段御届申上候也 八月十四日 兵部省 辨官御中」とあり、京都へ着いたことがうかがえる。

ところで、「朝日山の下に設ける火薬庫建設地」は、旅館亀石楼あたりか、それとも対岸の白川の地か？

同じく明治4年の「公文録 京都府の部」をみると、「城州宇治郷等へ火薬製造場取建二付地所兵部省へ引渡ノ儀伺」というのが明治4年4月23日付で京都府から辨官あてに出され、指示を待っている。場所は「城州宇治郷並白川村地内 反別七町九



反五畝貳九歩」となっており地図まで付いている。この時期まで明治政府は、「火薬庫」でなく「火薬製造場」を「黄檗」でなく「白川」につくることを予定していたのだ！

宇治の火薬調査のためにいろいろな資料を読んだが、ここに来て、一次資料「公文録」が示す強烈な事実にとだただ驚くばかりだ。

しかし、結果として「火薬庫」は黄檗宗万福寺の敷地を没収(上地)して、明治4年に「黄檗」に建設された。

宇治市史第4巻には、「人家密集地からやや離れ、かつ水運に便利な点から宇治川畔の宇治郷並びに白川村にまたがる地域、および五ヶ庄村が候補にあがった。当初は白川が有力で明治4年6月には用地の買収が決まっているが結局、五ヶ庄に決定された。この間の経緯はあきらかではない。」となっており、ますますこの経緯を知りたく、デジタルアーカイブを繰ってみたが、見つけれなかった。

宇治の火薬の始まりは大村益次郎であったとわかったが、依然、謎を残したまま、戦争遺跡の調査は続きそうだ。

※「国立公文書館デジタルアーカイブで提供するデジタル画像等については、任意にご利用いただけます。」

